

1. 開催日時 令和5年1月31日(火) 15:30~16:30

2. 開催場所 西条市庁舎本館5階大会議室

3. 出席者 【構成員】

西条市長 玉井 敏久

教育長 伊藤 隆志

教育長職務代理者 福田 亜弓

委員 礒 恒子

委員 鳳 慶洲

委員 一色 一成

【構成員以外】

経営戦略部長 高橋 雄次

教育委員会事務局長 三好 昭彦

教育指導監 松本 卓也

教育委員会事務局副局長兼教育総務課長 串部 佳隆

社会教育課長 前谷 浩教

学校教育課長 戸田 章裕

学校教育課指導主幹 黒河 幸彦

学校教育課指導主幹 内田 賢一郎

教育総務課教育総務係長 青野 洋士

【事務局】

経営戦略部副部長兼秘書課長 大西 保彦

政策企画課長 菅 裕臣

政策企画課政策企画係長 石水 好幸

政策企画課政策企画係副主査 篠原 彩

4. 市長挨拶

皆さん、こんにちは。先程、司会からもあった通り、本日のテーマは「西条市の学校規模適正化に向けた今後のあり方について」ということで、先日実施したアンケートの結果をご報告させていただく。ご案内の通り、愛媛県で今大きな話題となっているものの一つが、高校の再編の関係になる。私の勉強不足があればご容赦願いたいですが、実は愛媛県の高校再編は、どちらかというと着手が遅かったと私は認識している。子どもの数が減ってきている中で、学校規模・学校経営の適正化というところが求められているが、私たちが求めていくべきは、子どもたちにとってより良い教育環境を整備するということに尽きるのではないかと思っている。OBの方や同窓生の方は、自分の学校に愛着があるだろうし、地域からは、学校がなくなると、地域

の活性化にならないと言うような声も聞こえてくる。しかし、優先すべきは、学校の教育環境であり、子どもたちにとって何が一番適切なのかという点だと考えている。地域ごとに特性があってもいいのではないかとも思っているが、適正な学校及び学級の規模、そして学校経営、こういったところを我々も求めていくべきだと思っているので、今日は皆さんのご意見をいただきながら、今後のスケジュールに落とし込んでいきたいと考えている。

## 5. 協議

### (1) 西条市の学校規模適正化に向けた今後のあり方について

#### 【経営戦略部長から説明】

市長 先代（市長）も先々代（市長）も、子どもの声がある限りは、学校の再編成や統廃合はしないとの考えを持ち、私もそれを引き継いでいくという思いであった。しかし、各校区で実施するタウンミーティングで、ある保護者から、「市長、複式学級が本当に良いと思っていますか？」という投げかけをされたことがある。私は、地域に子どもの声がある限り統廃合はしないほうが良いのだと思っていたが、ひょっとしたら、これは行政の押し付けだったのだろうかと思わされた。令和2年に後期基本計画を策定する際、2030年あるいは2035年の人口推移を各校区に落としこんでみると、1学年10人が6学年で、全体で60人あるいは70人の学校が10校近く出てくるというような話になったこともある。

子どもたちの教育環境を第一に考えるという前提にはなるが、教育委員の皆さま、そして教育長も含め、それぞれの思いがあると思うので、今日はご意見を伺いたい。また、このアンケート結果に対する質問があれば発言をお願いしたい。

福田委員 学校規模適正化に関するアンケートを実施し、学校が果たす役割の再確認ができたように思う。児童生徒のより良い教育環境というのはどういうものなのか、学習環境、人間関係の構築等、全て満足できる環境が今の西条市にどれくらいあるのかということが、この結果から感じることができた。少し脱線するかもしれないが、まちづくり市民会議でいただいた資料（第2期総合計画後期基本計画ダイジェスト版）の最後のページに、西条市内の全ての小学校の児童数の推移が出ている。これによると、西条地区、神拝地区、多賀地区では、子どもたちの数が少し増えている一方、禎瑞地区、橘地区、庄内地区、徳田地区は児童数が少なくなっている。西条、神拝地区は、1学年4～5クラスなのに対して、禎瑞、橘地区は1学年1クラスという状況。西条市内の小規模校（1学年に1学級の学校）は、西条地区では9校中3校、東予地区では9校中7校、丹原地区は5校中4校、小松地区は2校中1校という状況であり、非常に多いと感じている。このような中、アンケート結果としても出ているが、集団の中で多様な考えに触れ、協力し合いながら切磋琢磨していくという環境を切望されている方が多いのだと改めて感じたところ。今後、学校規模の適正化に向け、どのように子どもたちの学習環境を整えていくのかを十分に検討していかなければならないと思う。

礮委員           この学校規模適正化に関するアンケートとは、学校統廃合の是非を問うアンケートと考えていいのか。

市長               学校統廃合の是非を問うものではなく、学校運営をしていくためには、どのような環境が望ましいか、保護者の皆さんや学校の先生側の立場からご意見を伺うために実施したアンケートである。冒頭でも申し上げたとおり、これから議論を深めていくものではあるが、適正な学校運営とはどういうことか、また、子どもたちにとってどのような教育環境が良いのかを考えたとき、結果として統廃合に進む可能性もあり得るといふ形で捉えていただけると有難い。

礮委員           児童、生徒の声を聞いたアンケートの結果があれば見てみたいと思う。今後、そのようなアンケートを実施する動き等はあるのか。

市長               小学校6年生、中学校3年生にアンケートを取るとなれば、質問内容やトレンドの捉え方等、問いかけの仕方が非常に難しいと感じている。

経営戦略部長    前回の総合教育会議の際、今回のアンケート対象者についてご説明させていただいた。他市の状況等をみても、子どもに直接アンケートを実施している例はあまりないが、保護者がアンケートに回答するときは、回答の過程で部活動の状況や子どもがクラス替えを望むか等、子どもの想いや願いを汲んだ形でご回答いただいているものと認識している。今後、教育環境の見直しを行う中、例えば子どもの声を直接聞いた方がよいという結論になれば、必要に応じて実施していくことも必要だと考えている。

一色委員           学校規模適正化ということだが、世の中というのは我々がコントロールできないところで常々変わっていると認識している。アンケート結果から色んな現状が見えてきていると思うが、想像を超えるような提案、のちにその議論ができればと願っている。一つ気になるのは、アンケート結果を踏まえどのように進めていくかということ。最近、よく“ウェルビーイング”というキーワードが出てくるが、これの難しさは、誰目線で見るとよって、進む方向が変わってくるところだと思っている。今話しているこの西条市が、今後どのような方向に進んでいき、また、我々がコントロール出来ない部分とは何があるのか、改めて考えていく必要がある。

                  例えば、住むエリアが決まると通う学校も決まるが、仮に住むエリアが決まっているとして、校区外の他の学校を選ぶという選択肢を設けることが可能なのかどうか。また、話は別になるが、先程、複式学級というキーワードが出たが、複式学級じゃないといけない理由は何か。複式学級という物事は、その物事だけで課題を解決することができるのか。一つ一つ分解しながら進めていくことで、こういった大きな物事は前に進んでいくのではないかと思う。皆で考えて進めていく必要があるの

ではないかと考えている。

市長 非常に大切な部分に触れていただいたと思う。言葉で言うのは簡単でも、どの目線で見えていくかというのは非常に難しいところ。そして、ある程度の合議を得ないと物事が進んでいかないというようなこともある。誰の目線だと考えたときに、やはり私たち大人が決めていかなければならない責務があろうかと思っている。子供の目線イコール親の目線だと我々は考えるが、学校の先生側の目線も非常に大切なので、様々な考えや意見を出してもらった上で、落としどころを探っていくという作業をしていかななくてはならない。

県立高校の話ばかりになるが、同窓会OBの目線からは、当然母校を残して欲しいだろうし、愛校心があれば尚更そう思うだろう。しかし、実際に通う生徒は、魅力のある学校、そして今後の進学のことを第一に考えたいと思っている子が多いかもしれない。声大きい方に誘導されてしまうこともあると思う。これからは、教育委員会が中心となりこの話を進めて欲しいと、教育長には申し上げているが、様々な立場の声をしっかり拾い、一定の合意を得ながら進めていきたいと思っている。

鳳委員 アンケートを全て見せていただいた。それぞれの規模なりの現実的な回答になっていたのではないかと感じる。学校規模適正化というと、どうしても小規模校に目が行きがちだが、小規模校も大規模校も全て含めた上で課題解決に向けて検討していくという配慮が必要ではないかとアンケート結果から感じた。

教育長 今回のアンケート、本当にありがとうございました。アンケートから、これからの時代に求められる教育環境や推進していくべきこと等が結果として表れているように思う。また、教職員の指導改善の方向性等を見つめながら、今現在の学級数、児童生徒数の下ではどのような課題があるのか、総合的な観点から分析していただき、そして我々が共通理解できているということは大変うれしく思っている。学校規模を適正化していくというのは、様々な要素が絡みあっており、本当に困難な課題であると認識している。現在、県立高等学校の振興計画が作成されようとしており、それが如実に示しているように思うが、やはり私たち教育を預かっている者としては、児童生徒の教育条件の改善という観点を中心に据えるべきだと思っている。そして、忘れてはならないのは、学校は地域コミュニティの核であり、まちづくりや地域づくりの機能も有した地域と密接不可分な関係にあるということ。保護者、就学前の児童をもつ保護者、地域住民の声も十分に拾いながら、進めていくべきだと思っている。地域コミュニティの存続に決定的な役割を果たす学校がある場合に、そこを統合するのはなかなか難しいことになると思う。小さな学校のメリットを最大化したり、デメリットを最小化したりすることにより、そういうところについては配慮していくことも必要かと感じている。

市長 これからは、教育委員会がイニシアティブをとって進めていくということで、今

後のスケジュール感も含めて、市長部局と教育委員会が一体となって取り組んでいくという認識で、皆さんに自分ごととして受け止めてもらいたいと思っている。このアンケートはその役割を決めるということで、経営戦略部が引き受けたが、ここはしっかり教育委員会側にもリードしてもらい、そういう形で臨んでいただきたいと考えている。

一色委員　　これから空き家に対する税制優遇がなくなってくることから、今後土地が動きやすい環境になるのではないかと感じている。このエリアはこう機能させたい、というように、全体をデザイン・設計していければ、今ある問題がより可視化されて取り組みやすくなるのではないかと思う。皆さんと一緒に考えていく環境ができれば良い。

市長　　コンパクトシティであれば、まちづくりは描きやすいし、機能を集約できれば、そこに集中的に投下してまちづくりが進められる。しかし、地域にはそれぞれ良さがあり、一括りにするのは難しい。まちづくりとして大切な視点ではあるものの、これを学校にリンクさせていくのは非常に悩ましく、ハードルをいくつも超えていく必要がある。考え方として頭に入れておきたい点ではあるが、これについては預かりにさせていただきたい。

礒委員　　私が思う学校は、子どもたちが学び合い、切磋琢磨できる環境の中で、仲間やたくさん先生の先生方と関わることで才能を見出せる場だと考えている。西条市の財政面を考えたら、このアンケート結果のとおり進めていくべきだとは思うが、どうしても気になるのは、デメリットの部分。精神的、体力的に大規模校に通学するのが難しい子どももいる。例えば、田滝小学校は校区制を撤廃しているが、そういった子どもたちの行き場はどうしていくのか、その点を一番心配している。このようなデメリットの部分を残すことなく、子どもたちを第一に考えて進めていってほしい。

市長　　自分はこう思っている。移住施策の話になるが、西条市はシニア層をターゲットにせず、若者・子育て世代をターゲットにした。移住というのはとても勇気がいることだから、チャレンジしようとして頑張ってくれた方々をこちらで精一杯受け止めよう、という思いで移住促進を行ってきた。そこには、教育環境が非常に大切になるのだろうと感じている。先程、礒委員からあったとおり、学校の個性をどのように作っていくかという点だが、県立高等学校に置き換えると、魅力のある学校づくりになるのだと思う。三芳小学校の話になるが、三芳の子どもたちはクラス替えがないので、中学校を卒業するまでずっと同じクラスになるのだが、今治東中学校に行くという選択肢もあった。これは確かに逃げ道になるのかもしれないが、そういう選択があってもいいと私は思っている。そういう視点から考えると、しんどいと感じる子どもたちが行ける学校を少し違う形で置いていくという形も考えられるし、あるいは、保育園から中学校卒業まで一貫的に教育を受けられる仕組みがあっ

でもいいのではと思っている。繰り返しになるが、統廃合のためにエリアの中で陣地取りをしていくのではなく、個性ある学校を残すという選択もありではないかと、個人的には思っている。

もう一つ、禎瑞の話になるが、ここは浸水区域に指定される地域になる。仮に、東日本大震災の際の岩手県の大川小学校と同じ状況になったとしたら、ここはどうなっていたらだろうか。震災時、先生方は子どもたちを助けたいという気持ちで動いたが、結果として裁判という形になってしまった。ハード面でそういう恐れがある以上、きちんと考えて対策をしていかななくてはならないと思っている。

教育長 文部科学省の資料を見ていると、学校統廃合というのは昭和 32 年くらいから出ている話題であった。よく考えてみると、私が中学生になるとき、旧西条南と市之川、中之池、加茂の 4 校で統合して西条南中学校になった。その時代から、学校の統廃合は世論の課題だったのかなと。その後、新西条市になって現在 18 年。これからが新たなスタートなのかなという思いがしている。

一つ私が思うのは、子どもたちの教育環境にとって一番大切な要素は教員だと思っている。教員のなり手が少なく、苦心しているのが現状。若手からベテランまでバランスの取れた教員配置を行うには、学校に一定の児童数が必要となってくる。アンケート結果をみて、その点も踏まえて考えていかなければならないと感じている。

福田委員 アンケートの中で、適切だと思う学級数と児童生徒数という設問で、皆さん 21 から 30 名ぐらいが適正との回答が大部分を占めていた。調べてみると、実は西条市内には 1 学級に 31 名以上の児童生徒がいる学校がそれなりにあることがわかった。そういったことから、教育現場に求められる理想と教員の事務量の多さにギャップが生じているのではないかと、その点もリンクしているのではないかと感じた。1 学級における児童数についても精査することで、先生方の負担が減り、子ども一人一人と関わる時間が取れるとか、プラスに動いていくことも考えられる。今回は小規模校に焦点を当てているが、今後、このアンケート結果をもとに、学校規模の適正化にどのように当てはめていくのかを改めて検討していただきたいと思う。

市長 このアンケート結果は、ひとつのベース材料ということで、これをもとに委員の皆さんからいただいた発想を活かしながら、学校規模の適正化に向けた検討を進めていきたいと考えている。このような方向性で進めてよろしいだろうか。

教育委員 異議なし。

市長 ありがとうございます。今後、学校適正規模適正化に向けての検討に当たっては、子どもたち、保護者、さらには学校、そして地域の皆さんと一緒に協力を進めていけるように準備していきたいと考えている。繰り返しになるが、これは教育

委員会にリーダーシップを発揮してもらい、私ども市長部局も一緒になって進めていきたいと思っているので、どうかよろしく願い申し上げたい。

せっかくの機会なので、その他として何かあれば発言をお願いしたい。

一色委員 全ての物事において私が大切にしていること、それは自分事としてではなく、後から来る人々のことを思いながら物事を考えていかななくてはならないということである。今ある環境で物事を捉えるのではなく、これからの人たちやこれからの西条市を思って取組みを進めていくと、皆さんが同じ目線で物事が進んでいくように思うので、ぜひそうして欲しいと思っています。

市長 目線という話をいただいた。私はよく「自分事として捉えなさい」と口にする。それは、他人事のように関わりを薄くするのではなく、我が事として考えて欲しいという思いを込めている。そこで置く目線は、少し先のことを見据えていただきたい、そういうことだと認識している。子どもたちは、私たちにとって、そして西条市にとっての宝である。子どもたちがこの西条に誇りや愛着をもってもらえるように、その環境を整えていくのが我々の使命だと思っている。そういう意味でも、一色委員の言葉は非常に重いものであると受け止めさせていただいた。

皆さまご意見をいただきありがとうございました。これは、本市の教育行政の在り方を考えていくことの第一歩になろうと思っている。教育委員の皆さま、そして教育長に改めてよろしく願いしたい。